

# チャライお兄さんに目を付けられて、縛られて玩具で連続でイカされまくって潮も吹いてぐしゃぐしゃになる男の子の話

体験版

受け：ユウマ

攻め：アヤセ

要素：平凡受け、前立腺責め、乳首責め、言葉責め、亀頭責め、拘束、玩具、潮吹き

付き合っていた恋人と別れて、半年が経った頃。浮ついた話のない俺を気遣った友達から、その手の人が集まる交流パーティに呼ばれた。けれど、誘ってもらったし、もちろん期待もあるから参加してみたものの、俺は元々社交的な性格じゃない。慣れない会場の雰囲気、完全に気後れしていた。

「ど、どうしよう。俺、こういうところ初めてで、話しかけるの無理かも…」

「何言ってるんだよ。もう別れて半年も経つだろ？そろそろ出会い探せよ」

逆に友達の多い友人は、先に来ていた顔なじみのグループを見つけて、そちらに行ってしまった。俺も彼のように、気さくに声をかけて出会いを求めに行きたいけれど、なかなか勇気が出ない。ここは一つ、お酒の力を借りてどうにかしようとバーカウンターで新しいドリンクをもらったけれど、多少飲んだところで効果は薄く、動けずにぽつんと一人で壁と友達になってしまう。

これじゃあ、休日にわざわざ来た意味がない。専用に用意された出会いの場でもアクションを起こせずに終わるのかとため息をつく。誘ってくれた友人には申し訳ないが、きっと収穫はゼロだ。

でも、そうやって俺が落ち込んでいた時に、ふと隣から声がかかる。

「ねえ、僕って今暇？」

「えっ」

俺のようにもじもじした人間に話しかける人は皆無だと思っていたから、驚いて声が出た。慌てて声がした方向に顔を向ける。ただし最初は喜びもあったけれど、彼を目に入れると別の驚きで上塗りされた。

左右の耳に大量に空いたピアスに、金色に染まってウェーブのかかった髪。つけられる場所には付けられるだけつけました、と言わんばかりのネックレスに指輪にブレスレット。チラリと見える、首から腕にかけたタトゥー。見た目からして明らかに自分とは違うジャンルの人だ。

チャライ。想像以上にチャライ人から声をかけられてしまった。でも好みじゃなくても無視をするのは失礼だと思うから、適当に答えを返す。

「あ、えっと、暇というか、俺は友達と来てて」

「へえ？友達ってどこ？」

そして俺が友人の話題を出すと、彼はドリンクを片手に沢山の人がいる方向を流し見た。なので俺も、俺じゃなくて友達の方に興味を持つかもしれないと、彼の居場所を探す。けれど、そうやって友人を探していたら、いきなり耳にキスされた。突然のスキンシップに慌てて、妙な感覚がした部分を手で覆う。すると悪戯をした犯人は、楽しそうに俺を指さして笑っていた。

「ちょっ、なんっ、なんっ」

「あっは！かわいい反応するねえ。ちなみに俺はアヤセ。僕はなんていうの？」

「...ユウマ」

「そんな嫌そうに言わないでよ〜。せっかく来たんでしょ？あんまりビクビクオドオドしてたら、ぱくっと食べられちゃうよ。怖い男に」

「アヤセさんみたいな？」

「まあ、ぱくっと食べるは否定はできないよねえ。でも俺、怖いことはしない主義」

ただしノリの軽い彼は、俺の心証が悪くなることなど一切お構いなしだ。だけど会場の雰囲気飲まれていた俺としては、これくらいグイグイ来てもらった方が助かるのかもしれない。だから全く好みのタイプではなかったけれど、一応彼の腕についたバンドを確認した。

ひと目でタチとネコが分かるように、参加者は受付で色分けしたバンドを配布されている。薄暗いパーティー会場でも目立つように蛍光色になっているバンドを見る限り、アヤセさんはタチだ。俺はネコのバンドを付けているから、おそらくアヤセさんも分かった上で話しかけている。

「アヤセさんは、俺のこと食いたいって思ってる？」

「美味しそうだなあと思うよ？」

「なんか誰にでも言ってそう」

「そんなことないよ～。あ、それとも逆に、ユウマが俺のこと味見してみる？」

こういう場に来ている以上、俺もアヤセさんも相手に飢えているのはお互い様だ。もちろん友達作りのために参加している人もいるだろうけれど、少なくとも俺はそうじゃない。

別に、ここでアヤセさんと何かが起きたとて、彼が初めての恋人になるわけでもない。わざわざ参加したんだから、ビビり過ぎなのも良くない気がする。だったらこれも経験だと、俺はアヤセさんの方に少し身体を傾けた。

「俺、多分アヤセさんが思うほど初心じゃないから。味見してガッカリするのはそっちなんじゃない？」

「え～？煽られたら試したくなっちゃうなあ」

俺のアピールに、アヤセさんはあっさりと乗ってきた。指輪だらけの指が俺の首を撫でると、皮膚ではない硬質な感覚に少しゾクッとする。

アヤセさんは俺のタイプでは無い。だけれど今まで付き合ったことのない人だし、久しぶりに夜の相手ができることに、俺もちょっと興奮している。

とはいえ、酒で気持ちが大きくなっていたのと、慣れないパーティで警戒心が緩んでいたのは否めない。だから一緒に来た友人に一声かけずに会場を後にしたのは、後から考えると失敗だったと思う。



「ひい、いあ、あ、ああああっ！！や、も、もうううっ！！」

「あれあれ～？またイク？3回も先に出したのにまたイクの～？」

「っ、も、もおいっ！負けでいい！俺の負けでいいからっ！」

「え～？ユウマ、我慢しないで諦めちゃうの？諦め早くない？このまま雑魚で終わんの？」

「ッ！！あ、あ...！んんんっ、ぎ、ああああうっっ！！」

「あははは！はいはい4回目え～。イキ過ぎて勝負になんないねえこれじゃ」

ガクガクと全身を突っ張らせて、4度目の絶頂に達した。精液の量は、最初の1発目と比べると大分少ない。でもこれは、俺がイキたくてイッているんじゃない。ほとんどアヤセさんに無理やりイカされている。

もちろん、最初は何もかも同意の上だった。ホテルでお互いシャワーを浴びた後、「せっかくだしどっちが先にイカせられるか勝負しようよ」なんて吹っ掛けられたもんだから、俺も彼との賭けごとにのってしまった。勝敗は言うまでもなく、アヤセさんの圧勝。俺はあっけなくイカされて、あえなく負けとなった。だけれど彼は、俺がいいなら3本勝負にしようよと提案してきた。それを俺は、簡単に負けてしまった俺への配慮かと思ったけれど、実際はただアヤセさんが俺をいじめる時間を伸ばしただけにすぎない。

当然ながら、2回戦目も負けた。この時点で3本勝負だったとしても、2回連続で先にイッた俺の負け。なのにたて続けに達してクタクタの身体を弄ばれながら、泣きの一回を認めてあげると言われてしまった。そして当たり前だけれど、2度も先に達した身体で耐えられるわけもなく、むしろこちらが泣きながらやめてくれと頼む羽目になった。

それから更に、次の一回が本当に勝負を決める一回にしようよと言われてこれだ。正直、3度もイカされた段階で決着はついている。今さら追加はいらないのは明らかだった。しかも四つん這いの状態でアナルを弄られているから、俺はアヤセさんに触れることすらできていない。

「あふ、う、うあ、あ、あああ...！」

「ねえ～、ユウマちょろすぎ。ここ押すとすぐイッちゃうんだから。見た目以上に雑魚アナルじゃん。それとも俺が上手すぎた？」

「んああああっ！！ッ、だめ、それ、それっ、い、イクから！あああやだやだ、イク、イクイクッ、あ、やっ、また...！またイッちゃうからああっ！！」

ぬちぬちぬちといい場所を2本の指で擦られるだけで、ガクンと腰が落ちて、ベットにお腹がつく。どうしようもないくらい気持ちよくて、俺は枕を握りながら首を振った。そんな様子を見て、背後の彼は心底楽しそうに笑っている。見た目からしてぶっ飛んでいるタイプの人だとは思ったけれど、中身も大概だ。今思えば、どうしてこんなに危ない人の誘いに乗ったんだと思う。でもホテルまで来て裸になってしまった今、早急に逃げ出すのは難しい。後悔先にたたずとはこのことか。いやでも、別に殴られたりするわけではないし、脅されているわけでもないからマシか、なんて。俺はどこまでも甘っちょろい思考だから、アヤセさんのいいように扱われてしまう。

「ユウマ、指でちょっといじったらイッチャウから勝ち目ないね～。俺もユウマのこといじめてるみたいでかわいそうになってきたし、少し手加減してあげようか？」

「っ、あ、ああ...!？」

4回目の絶頂の後、またなすすべなくイカされると思っていたのに、なぜかアヤセさんは指を抜いてくれた。それを俺は、挽回のチャンスを与えるための休憩だと認識したけれど、実際は全くの別物だった。

「テクニシャン過ぎる俺の指じゃなくて～。ユウマにはホテルのバイブと勝負してもらおっかな」

「は...!？」

ごそごと何かを探したアヤセさんは、いきなりバイブを話題に上げると、俺の尻に硬質な異物を押し付けてきた。ぬちりと孔に擦りつけられたバイブは、意外と太さがある。まずいと思って足を閉じたり暴れてみたけれど、それすら彼を楽しませる余興にしかなく、目からはほろりと涙が零れた。

「やっ、やだ、やだっ！入れないで、そんなの入れんなっ！！」

「ほらほら～、嫌ならちゃんと拒まないで、敏感エロアナルにぬるっと入っちゃうよ～？」

「ううっ、あ、や、あ、ああっ...！」

だけどそもそも、俺の格好が不利だ。彼にお尻を向けた状態だし、手や肩を押さえられたら前にも行けない。足を閉じてても、軽く臀部を開けば簡単に入り口が見えてしまう。

1センチ、2センチと、わざとゆっくり入ってくるバイブに怯えた。形が見えない分、中がバイブの形状をしっかりと読み取ろうと集中してしまう。

ただ、もっとイボが大量にあったりするのかなと思ったけれど、意外と形はシンプルなバイブだった。長さは俺の前立腺を押せるくらいはありそうだけれど、腹を突き破るほどの凶悪さはない。

「お～、ちゃんと全部飲みこめたじゃん。偉い偉い、ユウマのアナルはお利口さんだねえ」

「く、は、はっ、は...ッ！」

「じゃあスイッチ入れるね？」

「やうんっ！！？」

でも優しめのバイブとはいえ、全てを入れ切ったらそれなりに圧迫感はある。だから息を整えようと思ったのに、アヤセさんは早速バイブのスイッチを入れてしまった。

カチ、という機械音の後、中に入った玩具が振動を始める。ただしその振動はかなり弱めで、むしろじれったいくらいのものだった。

「うあ...！あ、あ、っ、っく、ううう...！」

「えっと～？ユウマのGスポはどこだったかな～？」

「んああっ！はう、ううううっ！！？」

だけれど、弱い振動のまま耐えろと言われたら、なんとか耐えれそうだと俺は思った。それなのにアヤセさんは、グリグリとバイブを動かして、先端を俺の前立腺に当ててくる。せっかく感じやすい場所は外れていたのに何をするんだと、シーツを握って首を振った。

「くあ、あああっ、そ、こ、だめ、ダメええっ...！」

「あ～あ、弱点見つかった？バイブにも気持ちよくされちゃうねえこれじゃ」

「は、う、ッ、は、はずし、て、こんな、俺っ」

「大丈夫。中のこと気にならなくなるように、俺が手伝ってあげるからね～」

「え、や、やっ！？」

でも額についていたシーツは、ずっと俺から遠ざかっていった。背後から身体を持ち上げられた俺は、寝具との距離が遠くなって、かわりにアヤセさんと近づく。座った彼に抱えられるようになった俺は、さっそく乳首を弄ろうとする彼の手首を掴んだ。

「ユウマは乳首も敏感さんなの？」

「ちょ、やだ、やだって！」

「その様子だとかわいい反応期待できそう」

「ん、んっ...！あ、ううんっ！」

ただし俺が嫌がったところで、止まる男ではない。すり、すり、と乳輪を数度指先で撫でてから、あえて乳首の周りを指でなぞる。そこで俺が背中を反らしたら、ぬりっと上から下に乳首を引っかかれた。少々の期待が上塗りされた乳首は、アヤセさんの指から与えられる刺激をじっくりと感じ取ってしまう。

「んはう...ッッ！！」

「ほら、いい反応。乳首もエロいね。エロエロ乳首」

「っ、ちが、エロくな、あ、あふっ、ううっ！」

「違わないでしょ？こうやって俺にかわいがられたら、勝手に腰浮いちゃうくらい感じるんだもんね？せっかくだし、ローションも足しちゃおっか」

「やっ！？いい、余計感じるからやだっ！ちょ、いらないっ、いらないってば！！」

「こおら。やだやだしないの」

「うああああ...ッ！！」

しかも俺に乳首責めが効くと分かったアヤセさんは、いらないと言ったのにローションをかけてきた。とろりと胸の真ん中に落とされたそれを伸ばしながら、ぬりぬりと乳首をこねられると、嫌でも身体が前に傾く。その身体を抱え直したアヤセさんは、わざと耳に顔を近づけて、息をかけるように話しかけてくる。

「ローションのせいで、乳首ぬるぬるになっちゃったね。かわいいピンク色が赤くなってきた。ほら見て、やらしい感じになってるよ？」

「ッ、そ、な、触られたら、誰だって...！」

「ほんとかな〜？こうやって優しく上下に擦るだけで感じちゃうのは、ユウマの乳首がえっちだからじゃないの？」

「ふあ、あ、あああ...！ん、も、やめてっ、乳首いじめないで...！」

「ねえ、動くとバイブが出てきちゃう。ちゃんと中にしまっておいて？」

「くうあゝ...ッッ！！？」

卑猥な囁きが聞こえると、耳が熱くなる。言われたとおりに乳首を見たら、濡れて光るその場所がいやらしくて目を閉じてしまった。でも見なくても乳首はこね回されるから、ゆったりと弄ばれると息が上がっていく。しかも抜けかけたバイブも元の位置に戻されると、微弱な振動で前立腺が刺激されて、じわりと腹の中から快感が広がった。

「はふ...っ！ああ、ん、んっ、んんん...！」

「どう？じわじわ気持ちよくなってきた？これ続けてたら、お腹ゾクゾクしちゃうでしょ？」

「ッ、あ、ああう、ま、って...！これなんか、ヤバいいいっ！」

「乳首も気持ちいいし～、お尻も気持ちいいし～...。あと、そろそろ耳とか～、ここも気持ちいいかも？」

「はくっ、うううっ！！」

ねとりと耳に舌が付いたかと思うと、ちゅ、じゅると、時々音を立てながら舐められる。それでぞくっと身体を震わせたら、下半身に伸びてきた手は、また別の場所を責めた。ローションのとろみを纏った手のひらや指が、太ももの内側や会陰を優しく撫でてくる。するり、すりすりとした柔らかい皮膚を撫でては、くにと外側から前立腺を刺激する感覚に、今度は下半身も占拠された。

「ふぐ、ッ、ああ、あっ、あ...！」

「一個一個は弱いけど～。こうやってじっくりじっくり、たっぷり可愛がってあげたら...。だんだんユウマの身体が甘えたさんになってくるからね？」

「ひんううう...ッ！うは、はっ、はふっ、あ、あゝううっっ！」

アヤセさんの言うように、部分を切り取って考えるなら刺激は弱い。耳だって舐めしゃぶられているわけじゃない。乳首も強くつねられたりはずせずに、摩擦を弱めて優しくこねられているだけだ。直接性感帯が責められているのは乳首とアナルくらいで、中に関しても振動が最弱のバイブが入っているのみ。

それなのに、今の俺は太ももや膝を少し撫でられたくらいで身体を大きく前のめりにして、ぎゅうっと中を締め付けてしまう。微弱な振動が前立腺に当たるだけでも、かなり感じている。でも刺激が嫌で身体を後ろに戻すと、次は耳への攻撃が再開されてしまう。

「んは...！あああああっ！」

「ねえ、やらしすぎるよ〜？なんでお膝なでなでただけで、身体ビクビクさせちゃってるの？くすぐったいのも気持ちいいの？」

「ッ、あ、あ、わ、かなっ...！あ、ひうっ、身体、変っ、にいッ！」

「あ、ほらまたビクってなった。ユウマったら、こんなゆるゆるの刺激だけでイキなくなっちゃったのかな〜？」

「や、あ、こんな...っ！？ま、って、ほんとに俺っ」

「待たない待たない。待つわけないよ？」

「〜〜〜ッ！！！！！！」

口調こそは能天気なのに、アヤセさんの言葉と手は的確に俺を追い込む。俺はそこまで性欲が強い方ではないはずなのに、こんなにもぬるい刺激の連続で達しうになっているのが不思議で仕方ない。いやらしいのは俺じゃないと思っているのに、彼から言われると、実は俺が変態なんじゃないかと考えてしまう。

それでも、イカされっぱなしの俺にもプライドがある。だから彼の手を振り切って前に逃げようとした。

でも、逃げられない。多分だけれど、アヤセさんは想像以上に力が強い。運動なんか嫌いですって見た目のわりに、しっかりと身体は鍛えているんだろう。こん

なところで日ごろの運動不足を悔いるなら、俺ももっとジムに通っておけばよかった。

「ああふっ、うう、うゝ うううんッ！あ、も、無理、無理無理っ！や、だめ、変っ、変なイキ方するっ！！」

「え〜？変なイキ方ってなゑに？俺に教えて？」

「やえ、で、やだ、許して、これもうっ...！ッひ、ぎ、だめ、だめ、だめだめだめだめ...っ！！」

「あはは！必死じゃんユウマ〜。でも、だめがダメだよ〜？変なイキ方するとこ見せて？」

「っ、あゝ ッ...！！？」

そして俺が下半身を突っ張らせて、意地だけで我慢していた時だった。不意に俺の熱を指で挟んだアヤセさんは、にゅりんと一度だけ指を動かす。軽く挟まれたまま上方向に自身を扱かれた瞬間、とうとう俺のキャパを超えてしまった。

「くゝッ、ああ...っっ！！ひ、うううううんっ！！！！؟؟」

ぎゅうっと身体が内側に丸まって、ガクン、ガクンと大きく2回身体が跳ねた。それから一度脱力したかと思うと、ひくっと不定期に身体がわななく。出るものが出ない分、身体の中に快感が浸透して、頭のとっぺんからつま先までどっぴりと絶頂感に浸っている感じがする。

「は、ふうう...っ！？く、うっ、んあゝっ、ああ...！」

「すごいイキっぷりだったよユウマ。でもなあ～、せっかく俺が手加減してあげたのに、あっさりイっちゃうのは弱すぎだね～」

「ふううう...ッ！」

イッた後は更に身体が敏感になっているみたいで、両乳首を指で上下に軽く弾かれるだけでも、彼の腕を握りしめなければ耐えられないほどに感じてしまった。それがむしろアヤセさんを興奮させるのだと分かって、根性で制御できる快感じゃない。

「んんっ！あ、ああ、だ、め、だめえっ」

「だめって声じゃないよ？さっきは散々嫌って言ってたのに、もう乳首でもイキそうじゃん。ユウマの変態」

「ちが、う...！ひ、っ、あ、変態、じゃ、ないい...！」

「あ～んなゆるゆるの刺激で全身ガクつかせてイッたくせに。説得力ないんだよね～。まあでも、イッたことには変わらないし。俺の事1回も気持ちよく出来なかったユウマには、少しくらいお仕置きしてもいいよね？」

「ひんんっ！！！？？」

ただし、乳首で終わってくれるならまだよかった。俺は一度イッたことで、完全にもう一つの弱点を見落としていた。

弱いままの振動で震え続けていたバイブが、スイッチの音と一緒に凶悪なくらい震え始めた。指とバイブで高められた前立腺には、あまりにも強い刺激だ。反射

で身体が前のめりになる。その身体を腕ごと抱えたアヤセさんは、逃げる俺を自分の方へと引き寄せた。

「う、あ、あああああああっ！！や、これ無理ッ！あああゝ あゝ 無理無理無理  
理iiiiっ！！！」

「ちょっと？お仕置きなんだから逃げちゃダメだよ～」

「ッ、き、つい、きついきついキツイiiiiッッ！！イクからっ！！こんな  
のすぐイクからあっ！！！！ひ、い、~~~~ッッ！！っあ、ああ、だえ、こ  
れ、イキ過ぎるから離してえええええっ！！」

「あははは！絶叫じゃんね、もう。ほらほら、ヤバイよヤバイよ？嫌なら頑張って  
逃げないと無限にイカされちゃうよ～？」

「うあああああっ！！んっ、んんんんっ！！は、はうっ、うゝっ、イク、イクイ  
ク、うう、うううんっ！！っ、だ、め、も、止めてっ！お願いだから止めてえ  
ええッッ！！！」

ぐっと下に腰を落とされると、最も気持ちいい場所をダイレクトに射貫かれるか  
ら、余計に頭が真っ白になる。なのにアヤセさんの腕を振りほどけなくて、延々  
中を弄ばれた。彼の上で首を振ってはイッて、イッたことで中を締め付けて自分  
を追い込んで、逃げなければと目がくほどに、戻される反動でまたイッてしま  
う。

「いやああゝ あゝ っっ！！も、死ぬっ、死んじゃうっ！！イクのやだっ、無理、  
もお無理iiiiッ...！」

「自分だけ気持ちよくなってるくせに、文句ばっか言うの何？むしろ文句言いたいのは、なあんにもサービスしてもらえない俺の方じゃない？」

「ひう、う、ごえ、なさっ、でも、でもっ！」

「ううん、謝られても許さないよ～？ちょろ過ぎてす～ぐイッちゃうユウマには、罰増やしちゃいます。はい、お手でもないないでしょうね～？」

「うあっ！！？」

けれど、地獄はまだまだ終わらない。イキまくりの俺には、追加の罰が待っていた。ドン、と身体をいきなり前に押されて突き倒されたかと思うと、ベッドに手をつく前に両腕を後ろに回される。そのうちの片手を引っ張られたかと思うと、何かが手首に巻きつけられた。嫌な予感がしたからもう一方だけは守ろうとあがいたけれど、後ろ向きの俺にはどうすることも出来ずに、両手首を拘束されてしまった。四肢が自由な状態でもアヤセさんにイカされまくりなのに、手の動きまで封じられてしまうなんて。どんどん悪くなる状況に、俺は無様ながらにただ首を振った。

「やっ、取って、取って！！」

「取るわけないじゃん、何言ってんの？お仕置き中なの忘れちゃった？」

「ッ、お、俺、別に...！こんなこと、されたかったわけじゃ...！」

「俺だって、楽しく二人でイチャイチャしたかったよ？なのにユウマが一人で勝手にイクからさ～。もうここ、空っぽになるまで出させちゃおうかなって気にもなるよね？」

「くうんっ！！？」

当然だけれど、腕が縛られてからは更にハードな愛撫が待っていた。肩をつく四つん這いになった俺の熱には、ローションまみれのアヤセさんの手が伸びてくる。ぬるんとその手が一つ撫でただけでも、俺の腰がへこりと下に落ちた。それを手首のバンドを引くことで上に戻されて、次はバイブを抜き差しされる。さっきまでは震えるだけだったバイブが動くことで、快感の度合いは増した。音が出るほど激しく抜き差しされるときもあれば、あえて奥をかき混ぜられたり、前立腺の上だけをしつこく抉ってくるときもある。この刺激で後ろだけでもイクのに、トロトロの手に前も撫でられるから、2か所からの責め苦で頭がおかしくなりそうだった。

「うああああああっ！！あああゝ あんっ！！だめ、イッてる、イッてるからあ...っっ！！っひ、で、てるっ、出てるうっ！！」

「だから、空っぽになるまで出させるって言ってんじゃん。腰落とすのも禁止ね」

「んああっ！は、う、で、ない、も、出ないいいっ！」

「はあ？普通に出てるけど。俺の手ぐしゃぐしゃにしてるくせに、嘘つくのやめてもらっていい？出ないって言うていいのは、このクパクパしてるそこからほんの一滴もでなくなってからだから」

「いあああゝっ！！？あふっ、そこやだ、やめて、え、ッ、は、はひっ、ッくうううう...っっ！！」

精液とローションで塗れる尿道を指先で擦られると、足と背中がゾクゾクして身体が崩れる。なのにこれが俺に効くと分かったアヤセさんは、拘束した俺の手を引くことで、身体の姿勢を維持させた。そしてもう片方の手で、しつこく尿道を愛撫する。

「あぁっ！あ、あ、も、だめ、許して、そこ弱いからぁっ！」

「ここ撫でると、だらあってやらしいお汁出てくるもんね。どうする？もっとエッチな感じで責めてあげよっか？」

「いいっ！いいから、あ、ひ、ッ、っう、あゝ あぁぁあぁぁっ！いあ、う、だめ、それもっとだめえええ...ッッ！！！」

テクニシャンなアヤセさんは、亀頭と尿道を責めるのも本当に上手かった。にゅくにゅくと亀頭全体を手のひらで包んで扱いてから、ぐっと下に手を滑らせて、露出した孔を指先でくすぐる。

俺の手を押さえるのをやめて、ぐいっと俺の身体を前に押すことで、勝手に腰が上がる体勢にされてからもひどかった。両手にローションを纏わせた状態で、亀頭も竿も双球もヌルヌルに撫でまわされる。もはやタラリと落ちるのが先走りなのか、精液なのか、それとも前立腺液なのか判断がつかない。とにかく全部でイッていて、下半身の感覚はほとんどなくなっていた。

「んぁぁぁぁぁゝ あゝ あぁ...！だめ、も、だめえっ！おかひ、ぐ、なるっ！先のとこ触るのやめてええッ！！！」

「ユウマはね〜。おちんちんの先っぽをこうやってむき出しにしてあげてえ〜。そこを人差し指でくるくるされるのに弱いかも〜。あとは足がガクガクしてるときに、優し〜く穴の所をなぞられるのも好きそうだよね？」

「ひっ、ひっ、ひぎ...っ！！あう、ッ、あ、ああっ！はあぐっ、く、ひ、ッ、やだ、許ひ、でっ、お願い、先っぽは許してえええ...！」

「粘膜は繊細だから、強く擦ったら痛いもんね？大丈夫、俺優しいから。ちゃんとトロトロのヌルヌルにして、優しく優しく撫でてあげる。ほら、腰下げないよ？ユウマの気持ちいいところ可愛がれないでしょ？」

「ふひうっ！あ、ッく、あ、ああっ！〜〜〜〜ッああああううううう...  
ッッッッ！！」

アヤセさんは確かに、俺に痛みは与えてこない。たっぷりとローションを足して、前も後ろも乾かないように配慮はしてくれている。だけど痛覚で意識を保つことも許されない俺は、絶頂へ向かうばかりで帰ってこれない。

もう分からない。特に前が気持ちいいけれど、バイブで犯される中でもイッている。基本的に彼の両手は俺の自身にまわりついていてものの、バイブに戻っていくときもあって、その時は両側から快感を与えられた。それから時々、会陰をしつこく下から上に撫でられるときもある。外側から与えられる、くすぐったいと気持ちいいの中間の感覚に、どんどん快感中枢をバカにされていく。

「あ、ッ、ん、ンンンん`ん`...っ！っひ、ひうあ、あ`ッ、や、こんなの、も、だめ、だめえええええ...っっ！！」

何もできない。何もさせてもらえないまま、全身が溶かされていく。アヤセさんに与えられる快感に浸食される。重なる絶頂に殺されかけている。逃げなければ死ぬ。そう思うくらい、俺は本当に参っていた。

「ああふ...っ！や、やっ、も、いいッ！！お、ねが、い、もお、ぬるぬる、やああああっ...！」

「痛くないようにって俺の配慮なんだから拒否しないでよ〜。あ、こら、また逃げようとするんだから。諦め悪いなあユウマ」

「だ、って、だってえ...！やだ、またイク、逃げなきゃイカされるっ！！」

「そうそう。良く分かってんじゃん。でも逃がさないけどね〜。ほおら、またヌルヌルのお手てでイキすぎちんぽ可愛がってあげるからこっちおいで〜？」

「んんん〜〜ッ！！ふぐ、ッあ、あああ...！あゝ〜〜〜っっ！！」

もちろん俺だって、逃げれるなら逃げている。もう耐えられる限界は過ぎた。でも俺が半歩でも離れようものなら、腕を掴んで引き戻される。だけれど逃げなければ、トロトロの両手が俺の敏感な場所を弄んでしまう。イキまくりで震える自身を撫でまわされるのがキツすぎて、何度も目の前に火花が散った。

自分のことなのに、何回イッたかも分からない。今、何をきっかけにイッているのかも判断できない。そしてこれだけの絶頂を重ねた結果、本当に出るものも出ない状態になった。

空っぽだ。俺から出るものはなくなった。今度こそ何も出ない。だから終わってくれ。もう目的は果たしただろうと、覇気のなくなった声で許しを請う。

「うあ、あ、アヤセ、さ...っ！俺、ほ、ほんと、にッ、出ないれす...っ！あぐっ、ご、え、なさ、許して、もお許してええ...！」

「ええ〜？ギブアップ早くない？まだ出るでしょ？てか、出なくなってもイケるかあ」

「ッ！？っっ！！ひう、あ、あゝああっ！！？やだっ、もう無理、おかひく、なう、も、おかひ、ぐう...ッ！」

「ほら、イキなよ。イッてイッておかしくなれ。俺にごしごしされて空っぽでもイッちゃえ」

「〜〜〜〜〜ッッッ！！！！！！ッ、ぐう、ううううううンンンッッッ！！！！」

だけれどアヤセさんは、俺から出なくなっても何一つ刺激を緩めてはくれなかった。空イキして嘆く俺の熱を、両手で激しく扱ってくる。射精を伴わない分、区切りがないから苦しい。なのにイッている感覚はあるから、俺の視界は一瞬真っ赤に染まった。

「ッ、は...！？あ、あ、あ」

「んふふ。イキすぎて飛ぶ？飛ぶほどおちんちん可愛がってもらえて嬉しい？」

「っひ、ッ、か、は、はっ...！」

「でも〜？ユウマはここをよしよしされるだけじゃ不満でしょ？」

「うあっ！？」

息がまともにできない俺は、自分に対して話しかけられている自覚はあっても、返事が出来る状態じゃなかった。だから細く荒い呼吸をしながら、必死で息を整える。けれどそんな俺をかわいそうなんて微塵も思わないアヤセさんは、震える俺の身体をひっくり返した。

ベッドに向かう四つん這いの格好だったのに、次は天井を見たまま足を開く体勢に変えられる。その時咄嗟に、触りやすくなったであろう熱を守るために足を閉じた。でも、アヤセさんの狙いは俺の性器じゃなかった。かがんだ彼がぴしりと乳首を弾いてきて、真の狙いに気づいた俺は心が穏やかじゃなくなる。

「んああっ！？やっ、な、ああっ！？」

「ちんこでイキまくった後の乳首～。効くね？これも」

「～～～っんん！！やっ、やだっ、やだやだやだっ！！」

「嫌々してるユウマの乳首舐めちゃお」

「ふあああんっっ！！」

さっきも乳首は触られたけれど、舐められるのはまた格別に気持ちいい。思わず閉じた足がだらしなく開く程度には、完全に快感に飲まれてしまった。それからはっとして首を振ったけれど、ちゅう、ちゅう、と甘く吸われると、胸が痺れて何も考えたくなくなる。

「んはぁ、ああ、あっ、やぁ、だ、め、乳首、気持ちいい...っ！」

「でしょ～？俺舐めんの得意なんだよね。いっぱい舐め舐めしてあげるから、今度は乳首イキも頑張るって？」

「ひあ、あんっ、んっ、んん〜〜〜...っ！はっ、はふ、ふっ、う、うあ、あああ  
ああっ...！」

身体の構造上、休めば精液も出てくるんだろうけれど、この短時間での復活は難しい。だったら出ないなりの楽しみ方があると、アヤセさんは思っている。そういう時の責め方だってお手の物だ。

チロチロと乳首を舌先で弾かれた後、甘やかされた乳首を軽く噛まれる。その時にもう片方の乳首を、くるくると円を描くようになぞるのがもどかしくて、不自由な身体が反っていく。そして突き出た乳首を舌全体で舐めてから吸われると、気持ちよすぎて腹の奥まで熱くなった。

だけど彼のいやらしいところは、単純な乳首責めだけにとどまらないところだ。アヤセさんは俺の身体を軽く抱きながら、自分の腰も振っている。すると密着した俺たちの股間が擦れて、昂った部分が触れあった。

ローションで滑るから、お互いの熱がぬるぬるしていて気持ちいい。でもこんなやり方でも感じている自分が惨めで、どうにか位置を変えられないかと腰を動かす。

「んんっ、んっ、んう、あ、や、だ、それ、やあ...っ！」

「ちょっと、素股嫌だからって逃げないでよ。結構気持ちいいでしょ、これも」

「だめ、気持ちいから、だめっ」

「ユウマって、えっち嫌いじゃなさそうだけど、遊び慣れてはない感じだよね。そういうの、俺的には新鮮で楽しいかも。ほおら、空イキちんコスリスリされちゃってるよ？逃げたいのにぎゅうされてるから逃げれないね〜？」

「ひいっ！！ッあ！あう、ん、や、やだ、も、やあああ...っ！」

でも腕が拘束されている俺は、アヤセさんを突っぱねることはできない。にゅり、にゅりと彼の熱を擦りつけられると、まるで犯される準備をしているようで惨めだ。

アヤセさんは、いつもこんなセックスをしているのだろうか。相手をいいように弄んで、イッてもイッても過酷に追い込んで、泣いても終わらないようなセックスを。俺だってちょっとくらい嫌だと言ってもやめてくれない意地悪をされたことはあるけれど、今日はレベルが違う。

逃げたいのに、一切の逃げが許されない。最も嫌な部分をじっくり責められて、一つ一つ彼に手籠めにされていく。

「んああ、あ、も、やだあ...ッ！乳首イクっ、イクから！も、舐めないで、口離してええっ！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー